

高齢者の交通行動特性から見た高齢者交通事故の要因分析

金沢大学工学部 正会員 高山純一

金沢大学工学部 ○小寺一樹

富山県警察本部交通企画課交通総合対策室 高島良一

1. はじめに

近年、高齢者社会がかなり深刻化してきており、それに伴う高齢者の交通事故が急増してきている。高齢者事故の防止のためには、その事故要因を詳細に分析する必要がある。その際、もっとも重要視すべき点は高齢者事故だけに見られる特徴を見いだすことである。そのためには、高齢者の日常の行動特性を把握することが重要である

ここでは高齢者の交通行動特性を分析するために、意識調査と行動調査の2面から調査を行い、高齢者の行動特性の分析を行う。具体的には、アンケート方式で意識面からの調査を行うと同時に、交通事故が起こりやすい場所を対象に、車と歩行者、車と自転車のビデオ撮影によって、それぞれの交通特性を分析する。今回は特に特徴的な都心部と郊外部の2つの地域を取り出し比較研究を行う。

ため、郊外に住んでいてあまり都心に外出しない高齢者などが対象外となり、データに偏りが見られる可能性が考えられるためである。したがって、都心部・郊外部の高齢者を全て対象とする手段として両方法の併用をおこなうものとする。

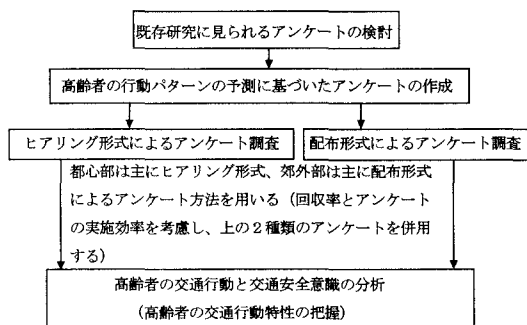


図-1 アンケート方式による
意識調査の概要

2. 高齢者交通事故分析のための高齢者の交通行動特性の分析

2-1 高齢者の交通行動特性に関する意識調査

高齢者が普段どのような日常生活を送り、その中で外出時における行動形態をアンケート方式（意識面）を用いて把握することで、高齢者の行動特性を分析しようというのがここでの主旨である。

アンケートの中では、道路横断に関する項目、対向・背面の両方のすれ違いに関する項目、夜間・冬季における交通行動に関する項目、などについて具体的な設問を設定し、より詳細なデータを得よう配慮した。

ここでは（1）ヒアリング形式によるアンケート調査と（2）配布形式によるアンケート調査の2種類の調査を実施する。具体的なアンケートの調査方法を図-1に示す。これは対象者が高齢者ということで封書での配布による方法だけでは回収率が悪いことが予想される反面、アンケート方式だけではどうしても高齢者が多く存在する地域での調査になる

2-2 高齢者の交通行動特性に関する実態調査

高齢者の意識調査と並行して、実際の高齢者の行動を把握するために交通行動に関する実態調査を実施する。今回はその手段として、場所をいくつか選定して、その場所においてビデオ撮影を行う。選定場所の条件としては、次の点が挙げられる

- ①比較的交通量が多く、道路幅の広い幹線道路
- ②郊外部の交通量のさほど多くない道路
- ③商店街などに代表される道路幅の狭い路側帯と車道の分別が不明確な道路
- ④高齢者が比較的多く活動している高齢者施設や病院近辺の隣接道路

このような場所を選定する理由としては、次の点が考えられる。

- ①高齢者が実際に道路を横断する際、信号が青の間に横断できているかどうかなど、交通安全施設が高齢者にとって十分効力を発揮出来ているのかを調査・分析する。
- ②見通しが良く交通量もさほど多くない道路にお

いて高齢者は実際交通ルールを守った交通行動を行っているのかどうかを調査・分析する。

③道路幅の狭い道路において歩行高齢者や自転車高齢者が車とすれ違う際に、

- ・高齢者と車との間にどれくらいの距離があるか
- ・車はどのような速度で高齢者の横を通り過ぎるのか

特に歩車分別が明確にされていない道路においては高齢者はどのような位置を行動し、車が来た時どのような回避措置をとるのか、また車が高齢者の対向、背面から来る場合、それぞれ相互にどのような行動の違いが生じるかなどを調査・分析する。

④高齢者が比較的多く存在していると考えられる施設などの周辺道路において、高齢者はどのような交通行動をしているかを調査分析する。

⑤信号機の設置されていない横断歩道での歩行者と車の交通行動をビデオ撮影し、その特徴を分析する。

ここでは、特に②③④⑤を重点的に調査観測することにした。

これらの意識調査と交通行動実態調査の分析結果を総合して高齢者の交通行動特性を把握し、現在の交通環境が高齢者に対してどのような部分で弱点となっているのかを高齢者側の視点で検討する。このアンケート方式による意識調査とビデオ撮影による実態調査の分析結果については、後日講演時に発表したい。

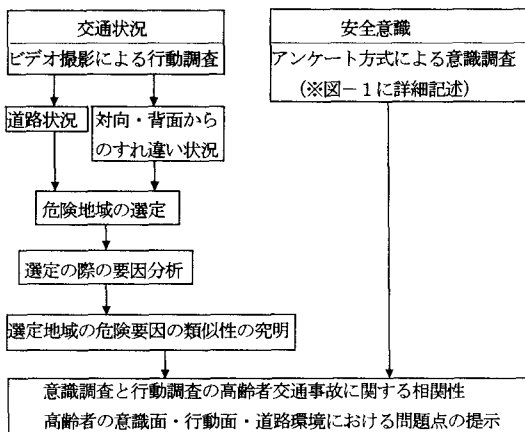


図-2 高齢者の交通行動特性分析の概要

3. 都心部と郊外部との高齢者の交通行動特性の比較研究

都心部と郊外部とでは、その環境の違いにより高齢者の行動にも相違点が見られることが予想され、行動範囲、行動手段によってもかなりの違いが見られると考えられる。このような前提のもとに、先に行った行動特性に関する調査・分析の結果データから都心部と郊外部における比較研究を行う。

また、交通死亡事故全体に占める高齢者交通死亡事故の割合が、とくに高い富山県と石川県との比較研究も行う予定である。ここでは特に、県都である富山市と金沢市の間にどのような相違点が見られ、それが高齢者の交通事故にどのような関連性を持つかを分析する。この分析結果についても先の調査と関連づけて後日講演時に発表したい。

4. 結果

以上の調査結果をもとに、高齢者の交通行動の特性を明らかにするとともに、高齢者の意識的な面での問題点、改善点を見出し、それらを今後改善していく手段、また高齢者に対処していくための道路環境や運転者の意識面での課題を取り上げ、高齢化社会における交通事故防止への基礎データとしたい。

[参考文献]

- ・鈴木春男：「生活構造から見た高齢者交通政策への提言」（国際交通安全学会研究調査プロジェクト報告 vol22 No.2 pp129～139/1996年9月）
- ・家田仁・村木康行・渡辺良一：「モビリティの改善は高齢者の生活活力向上をもたらすか」（国際交通安全学会研究調査プロジェクト報告 vol22 No2 pp139～146/1996年9月）
- ・澤田等・椎名康雄：「高齢者の歩行行動に関する実態について」（第16回交通工学研究発表会論文報告集 pp197～200/1996年11月）
- ・荻田賢司・三井達郎・矢野伸裕：「高齢者の横断歩道利用状況に関する研究」（第16回交通工学研究発表会論文報告集 pp201～204/1996年11月）
- ・日野泰雄・山中英生「住区内狭幅員道路における錯綜危険度と交通安全意識に関する研究」（1996年度第31回日本都市計画学会学術研究論文集 pp391～396）